

## 西洋中世学会第4回大会シンポジウム

### 「中世とルネサンス——継続／断絶」報告要旨

#### 趣旨説明

コーディネーター：伊藤 博明（埼玉大学）

「中世とルネサンス」という、神をも恐れぬ、と言うべき、あるいは犬も食わぬ、と評すべきシンポジウムのタイトルは、私（たち）が発案したものではなく、西洋中世学会事務局から提示されたものです。急遽集められた提題者たちの研究領域は、中世後期から近代初期にかけての歴史学・美術史・科学史・英文学・思想史であり、地域的な差異を加味するならば、一同に会した途端に疑惑と混乱が生じて不思議ではありません。その結果、「継続／断絶」という、窮鼠猫を囓む、ような副題を私（たち）はつけてしまいました。

12世紀に活躍した哲学者シャルトルのベルナルドゥスは、「われわれは巨人の肩に乗っている小人（nani）のようなものだ」と述べて、古代からの伝統に依拠していることを自覚していました。他方、15世紀の後半、ヴェネツィアの人文主義者エルモラオ・バルバロは、友人への書簡で「中世の哲学者たちの言葉は無教養で野蛮であり、読むに値しない」と書いて、スコラ哲学という巨人を一刀のもとに斬り捨てています。ただし、哲学的な観点から見れば、いわゆる「12世紀ルネサンス」の方が大きな転換点であったと言うべきでしょう。歴史においては「逆なでに読む」ことが常に要請されます。

「継続／断絶」はいつの時代にも、いかなる領域にも必ずや存在しています。本シンポジウムでは、主として15世紀と16世紀において見いだされる「継続／断絶」について5つの具体的なサンプルをご覧いただき、出席者の方々のご批判を仰ごうと考えております。そして議論の中で、もし「中世とルネサンス」という問題が浮かび上がる瞬間が訪れるならば望外の幸せです。

#### 第1報告 書籍と文化——結節点としての書籍商

徳橋 曜（富山大学）

いわゆる人文主義がラテン古典への関心から発展したことはよく知られている。彼らが理想ないし手本とした「古代」と彼ら自身の時代との間には「中世」（medium aevum）が横たわり、大きな断絶が意識された。しかし、言うまでもなく、この新しい文化的動向は中世からの潮流を継承した部分を持っていた。古典への関心自体は14世紀前半から顕著に見られるものである。そうし

た関心や知識があつてこそ、人文主義者と称される知識人達が現れることになった。彼らはより正確な古典の理解に関心に向け、原典に近い写本を追求した。彼らが相互のネットワークを通じて情報を入手し、良質な写本の探索に努めたことは、近年の甚野尚志氏の論考でも明らかにされている。同時に、そうした情報と文献の入手を考えると、ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチのような書籍商の存在を考えないわけにはいかない。彼らは写本の探索・複製・販売に携わっていたのである。13世紀より大学周辺には多くの書籍商がいたが、大学周辺に限らない書籍商の存在については、概説的には指摘できるものの、実態は必ずしもよく判らない。しかし、フィレンツェについてベックが明らかにしたような書物の普及も、15世紀後半以降の印刷業の急速な広まりも、それまでの書籍業の存在を背景にしていると考えられる。本報告では近世の印刷業者にも射程を延ばしながら、14～16世紀のイタリアにおける知の継承と分散を紙販売・書籍商 *cartolaio* の存在を意識して考えてみる。

## 第2報告 ピエロ・ディ・コジモの絵画——継続／創造

出 佳奈子（弘前大学）

「異教的ルネサンスはもう沢山だ」——リチャード・トレクスラーが論文『フィレンツェの宗教経験：聖像』の冒頭でこのように述べたのは、1972年のことである。ブルクハルトによる著作以降、美術史学の分野において「ルネサンス」の語は、古代美術の再生に務める15・16世紀の時代を意味してきた。その語義の形成には、この時代のとりわけイタリアの美術への憧憬が大きく作用していたと言えよう。その後の図像学研究が、ルネサンス美術において古代を示唆する図像の多くが、実際には中世の図像伝統に連なるものであることが示されてきたにもかかわらず、これらの世紀と古代とを結び付ける時代観は、こと美術の分野において根強いものと思われる。トレクスラーは、このような動向に対して、中世以来の聖画像崇敬の伝統がルネサンスの時代にも継続していたことを示し、美術史研究に新たな方向性を与えたのだった。この発表では、15世紀末から16世紀はじめのフィレンツェで活躍した画家ピエロ・ディ・コジモの画歴を参照しながら、ルネサンスの時代におけるイメージ受容の有り様を検討していく。この画家は、オウィディウスの『祭暦』をはじめとする古代の著作を典拠とした物語画を描いたことで名高いが、一方では、中世以来人々の信仰を集めてきたルッカの「聖顔」を忠実に写し取った作品を残している。彼の絵画には、この時代の絵画受容における二面性、すなわち、中世から継続する伝統的側面と古代に憧れる人々によって創造された新たな側面の双方を確認することができる。この考察を通じて、美術史における中世とルネサンス、これら二つの時代概念の位置づけを改めて確認したい。

## 第3報告 記憶の浄化と英文学史の創出——テューダー朝初期の古物研究家たち

ヘンリ八世治下のイングランドで断行されたローマ教会からの分離独立、とりわけ宗教改革の一環として 1536 年以降に開始された修道院解散は、過去との訣別を強烈に印象づける出来事であった。修道院の閉鎖は、その付属図書館に所蔵された多くの書物の喪失と散逸を招くことになるが、これに先立つ 1533 年、国王の忠臣であった人文主義者ジョン・リーランドは、イングランドとウェールズ各地の修道院を訪ね、それぞれの施設が所有する蔵書の目録の作成に着手する。やがて修道院の解散が進められると、リーランドは写本の蒐集や保存にも尽力し、ペトラルカの *De viris illustribus* の例に倣い、ブリテン島で活躍した著述家たちの伝記的叙述と作品目録を含む壮大な規模の作家列伝の構想を抱く。こうしたリーランドの活動は、国王の一連の改革に異議を唱えるものではない。彼はむしろ著作の随所で蒙昧の闇に閉ざされた過去と現在の断絶を強調し、真実の光が「迷信」や「誤謬」によって曇らされてきたことを慨嘆する。だがその一方で、宗教改革後の国家の威信を支えるものがブリテン島で独自に育まれた文芸の系譜のうちに見出されることを確信し、そうした伝統の存在を国外に示すことを急務と考えた。本発表は、リーランドおよび彼と親交のあった複数の好古家たちによる文学的伝統の構築とキャノン形成の企てを考察することにより、宗教改革期から現代に至るまで連綿と受け継がれることになる英文学史観の批判的な検証を試みる。

#### 第 4 報告 変容する存在の大いなる連鎖：中世とルネサンスにおける最善世界論

坂本 邦暢（東京外国語大学）

本発表は中世とルネサンスという二つの時代区分のあいだにある連続性と断絶面に思想の歴史の領野から接近しようとするものである。12 世紀から 16 世紀にかけて大学を中心に営まれていた哲学的・神学的議論は数百年にわたって強い連続性を保持してきた。同一の問いが時代も地域も異にする様々な論者によって追究されたのである。そのような問いの一つに、この世界は最善の世界であるか否かというものがあった。肯定的回答は神の全能性を、否定的回答はその善性を損なうというジレンマを抱え込んだ問いであった。アベラールによる提起以来、この問題は思想の連続性を織りなす縦糸の一本として機能し続けることになる。しかしそれにたいする盛期中世の論者と、16 世紀イタリアのとある哲学者のアプローチの仕方を比べるならば、両者のあいだで議論の力点に変化していることに気づかされる。このような変化はなぜ生じたのか。その答えは狭義の思想史のうちではなく、哲学的・神学的議論の営みを支える制度的基盤の水準に求められねばならない。以上のように中世思想とルネサンス思想の連続性のうちにある断絶面を考察することから、思想史の分析素材をより広い歴史学の領分に接続することが本発表の目的である。

## 第5報告 シビュラの行方——クウォドウルトデウスからジョルダーノ・オルシーニまで

伊藤 博明（埼玉大学）

ユダヤ教徒とキリスト教徒がギリシア語で作成した偽書に、『シビュラの託宣』と呼ばれている文書が存在するが、各巻の執筆年代も作者も意図も一様ではない。この託宣集自体がヨーロッパの中世で直接参照された痕跡は見いだされず、中世における伝承は、ラクタンティウスの記述に拠った、アウグスティヌス『神の国』にもっぱら基づいている。

加えて重要な作品は、アウグスティヌスに帰されていた、クウォドウルトデウスの『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』である。この説教では、旧約聖書の預言者と並んで、異教徒たちにキリストについて予言したシビュラについて述べている章を含んでおり、この部分は単独でクリスマスの説教の際に読まれた。他方で中世には、シビュラの名前を冠した偽予言書がいくつも作成され、たとえば『シビュラの詩編』と『エリュトライのシビュラの予言』が挙げられる。

1430年頃にローマの枢機卿ジョルダーノ・オルシーニは自邸に預言者とともに12名のシビュラを描かせた。彼女たちに帰された託宣は、クウォドウルトデウスに加えて、中世に出現した上記の二作品からも採られ、全体としてはハイブリットなものと化している。本発表の目的はオルシーニ邸のシビュラの歴史的・文化的コンテクストを探究することによって、ローマの人文主義における「継続／断絶」の一側面を明らかにすることである。